

図書館だより

第33号 令和7年3月発行



大島商船高等専門学校図書館
山口県大島郡周防大島町大字小松1091番地1

目 次

巻頭言

海のものとも山のものともつかず	図書館長	浅川 貴史	1
-----------------	------	-------	---

第 2 2 回読書感想文コンクール優秀作品発表

最優秀賞

あたりまえに感謝をして	情報工学科 1 年	津曲 咲希	2
-------------	-----------	-------	---

優 秀 賞

歴史を紡ぐ-現代社会に息づく日本の美	情報工学科 3 年	倉増 風紗	3
52 ヘルツの声を聞かせて	情報工学科 3 年	藤井 凜	4

佳 作

届かない苦しみを聴くために	電子機械工学科 2 年	村本 知樹	5
変化	電子機械工学科 2 年	岡田 紘	6
声	情報工学科 2 年	宮崎 蘭	7
諦めない心	商船学科 1 年	藤本 大雅	8

第 4 回読書ラリー優秀者発表 9

推薦図書

新版 動的平衡 生命はなぜそこに宿るのか	電子機械工学科	岡野内 悟	10
人工知能プログラミングのための数学がわかる本	情報工学科	中村桃太郎	11

ブックハンティングに参加して 12

図書館利用状況 15

巻頭言

海の物とも山の物ともつかず

図書館長・図書館司書 浅川 貴史

皆さん、「ことわざ」は好きですか。「諺」という漢字もありますが、私は「言技」という当て字も好きです。今回はそんなことわざの中から「海の物とも山の物ともつかず」について調べてみました。まずは私の手持ちの辞書（スーパー大辞林）の解説では「物事の正体・本質がつかめず、どっちとも決めかねたり、将来を予測できなかつたりすることのたとえ。」と書かれています。私の感覚では、「どっちとも決めかねたり」という部分から、これから何かが起きそうな期待感が感じられませんか。また、英和辞典（ウィズダム英和辞典）で「海」の用例に「彼はまだ海のものと山のものともつかない」の英訳として「We don't know yet how he's going to turn out.」と書かれています。「yet」って感じが良くないですか。これからこの物語はどう展開していくのかというワクワク感がありませんか。一方、これを goo 辞典などのネット検索では、「物事の正体・本質がつかめず、将来どうなっていくか見当のつかないたとえ。」となっており、どのサイトもほぼ同じです。しかも「見当のつかない」とけんもほろろの書きっぷりです。何かネガティブ思考ですね。

次に「海の物」「山の物」についても考察を加えて行きましょう。私たち商船高専は「海の物」関連でしょうか。また私の趣味である登山は「山の物」関連ですかね。このどちらも決して怪しい物ではなく、大海原を開拓したり、未登頂の頂を目指したりと未来志向であるように感じます。さらに近年は海の影響は森や川などの山の環境に大きな影響を受け、山の環境を左右する気象という点でエルニーニョ現象など海の影響を強く受け、いわば切っても切れない間柄であることは SDGs などでも謳われています。このような観点からも一見無関係であったり、真逆と思えることにも常に探究心を持って物事の本質を追い求め、将来をより良い方向に導くことが重要なのではないのでしょうか。皆さんもいろんな分野の本を読んでください。最後に私の好きなことわざは「国破れて山河あり」、人も国も無益な対立は何も生みません。俯瞰的な視点を大切に。



“山より海を制す”

玖波槍（大竹市）山頂にて

最優秀賞

あたりまえに感謝をして

『52 ヘルツのクジラたち』 町田 そのこ 著 中央公論新社

情報工学科 1 年 津曲 咲希

私は今回、課題図書である五冊の本の中から『52 ヘルツのクジラたち』を選びました。映画化されているから、という理由でこの本を選びましたが、そんな理由ではこの物語を読む覚悟が足りなかったと今では思います。そのくらい考えさせられる本でした。ですが、同時に自分の考え方の幅が、物事の捉え方が広がったように感じます。私の内側の品格を豊かにしてくれる本と出会うことができました。読んでいる途中、物語に引き込まれて夢中になり、たった一日で読み切ってしまいました。

『52 ヘルツのクジラたち』は壮絶な過去を経験した三島貴瑚があるアクシデントをきっかけに、元いた地から遠く離れた大分県の港町に引っ越します。そこで虐待されていた子供、通称「52（ごじゅうに）」と出会い、新しい人生がはじまっていく、という物語です。52 にちゃんとした名前はついていますが、三歳の時に母親に舌に煙草を押しつけられて以来、喋ることはできますが、意図的に言葉を発さなくなっていました。なので貴瑚が 52 の事情を通して本名を知るまでは、「他のクジラには聞こえない周波数で鳴く 52 ヘルツのクジラ」にちなんで 52 と呼んでいました。

私は特に印象に残っている場面があります。ここで私は、自身に出来る事は何か考えました。貴瑚が 52 の面倒を見る、ということ、52 の母親である琴美に伝えるためにとり天屋に行った時のシーンです。貴瑚が琴美を呼び出すと、琴美は 52 のことなんて頭に無かったのか、「村中とは何も無い。心配するな」だの「彼は昔から私に憧れてた」だの今は枯れ果てた過去的美貌に縋り付き、自惚れた発言をしました。虫酸が走りました。反吐が出るかと思いました。こんなにも幼稚な大人が居るのか、と。琴美は村中と同世代だから三十歳手前の年齢ですが、何だか自分よりも年下の何も分かっていない子供を見ているような気分になりました。そして貴瑚が、「息子さんについての話したい」と言うと、琴美は「息子などいない」としらばっくれたのち、貴瑚が虐待について言及すると、琴美は「私の食べようとしたピザを食べたから嫉妬ただけ。私が産んで面倒を見てやっている。あいつのせいで人生が狂った。私こそが被害者」と言いました。私は、自分の意志で作った子供を自分の意志で産み、挙げ句の果てに子育てから道を外れて被害者面をして、こいつは正気かと思いました。怒られることを知らず、ただ甘やかされて生きてきた子供の末路がこれとは、恐ろしいとさえ感じます。生まれてくる子供は生まれる場所さえ選べない。生まれてこれたと思えば親次第で生まれてこなければよかったと思う環境になってしまう。こんなのあんまりだと思います。でもこれはこの本だけでなく、現実でも起こってしまっているのが事実です。私の知らないどこか遠くで 52 ヘルツの鳴き声をあげているクジラが、子供がいるのです。その子の声が聞こえている人は、きっと少なくないでしょう。その中でも、手をさしのべる人もいれば、聞こえないふりをする人もいるし、笑いものにする人もいるかもしれません。私は後者二人にはならないと誓います。助け出せる状況なら良いかもしれませんが、下手に動けば状況が悪化しかねません。だから私は行動するのも良いと思いますが、その子の心の支えになれるようになりたいと考えます。話を聞いてあげるだけでも、そばにいただけでも、その子の心が少しでも軽くなったらうれしいです。無力な子供なりに、できることは限られていても、その子のためになることなら何でもしてあげたいです。

私は今、両親に恵まれ、友達に恵まれ、愛するペットがいて、不自由なく幸せな日常を送ることができています。それをあたりまえとする世の中で、あたりまえをあたりまえにできない思いをしている人達が多勢いることも確かです。私は、この日常をあたりまえだと思わず、広い視野で俯瞰することが大切だと、この物語を通して学びました。心と体の性別が違っている、トランスジェンダーの人、親からの愛情を本来受けるべきなのに、受けることのできない、虐待された子供たち。他にも様々な問題を抱えた人物が登場しました。どんな問題を抱えた人でも、偏見なく、平等に迎えられる世の中になるべきだと思います。そのためには、今幸せな日常を送れていることをあたりまえだと思わず、身のまわりの些細な出来事一つ一つに感謝して生活していかなければいけないな、と気づかせてくれた作品でした。

優秀賞

歴史を紡ぐ-現代社会に息づく日本の美

『美しい日本の私』 川端 康成 著 講談社現代新書
情報工学科 3 年 倉増 風紗

川端康成という名前を聞いて、まず浮かぶのは彼の代表作『雪国』にも表れる繊細な文体と、深い洞察に基づく独特の美的感覚である。私が本書『美しい日本の私』を手にとったのも、まさに川端康成という作家に惹かれたからだ。彼の視点から日本の美がどのように語られるのかを知りたいと思ったのである。

本書『美しい日本の私』は、筆者がノーベル文学賞を受賞した際の記念講演『美しい日本の私—その序説』を中心にまとめられた随筆集である。講演では、伝統的な日本の美意識がテーマとして語られている。古典文学や和歌を引用しながら筆者が強調したのは、四季折々の自然の美こそが日本人の精神性の根源であるということである。一方、『末期の眼』では、人の末期の眼には自然はいつそう美しく映るという感覚の世界を説明し、生と同様に死もまた自然への回帰であると述べている。文学に美しさや自然観を求める一方で、芸術の極意を「末期の眼」とする筆者の繊細な心情や死生観が、本書から感じ取れる。

私が本書を読んで印象に残ったのは、筆者の『源氏物語』に対する深い思い入れである。複数の章で、『源氏物語』『枕草子』『平家物語』などの古典文学が引き合いに出されているが、その中でも源氏物語に対する彼の思いは格別なものがあつた。驚いたのは、筆者が源氏物語を「日本文学の最高傑作」と評し、源氏物語におよぶ小説は、今日までの日本に、まだ一つもあらわれていない、とまで述べたことだ。私はこれまで源氏物語を『桐壺』と『末摘花』の現代語訳しか読んでおらず、そのために最高傑作たる所以を十分に理解できなかった。しかし、読了後に『源氏物語』について詳しく調べると、確かにその考えが変わった。現代では『源氏物語』は恋愛小説というイメージが強いが、時代ごとに異なる位置づけがなされていることを知った。それでもなお、多くの人々に長らく愛され続けていることから、『源氏物語』はやはり不朽の名作であることに疑いはない。

また本書では、筆者が『源氏物語』を例に挙げ、日本特有の美意識の一つである「もののあはれ」を解説している。哀愁や無常観について深く掘り下げ、古典作品を例にとりながら日本の美を語っている点が印象的だ。こうした古典文学やその他和歌や詩句の引用を通じて私が感じたのは、知識が美の源泉であるということである。例えば、筆者は東京から列車で近江路を通る際、松尾芭蕉の句「行く春を近江の人と惜しみける」を思い浮かべ、その風光に感動するというエピソードを紹介している。筆者が感じ取った美の感覚は、彼の豊富な知識がその背後にあったからこそ、より深く、繊細に表現できたのだろう。先人たちの美意識を受け継ぎつつ、そこに新たな発見を加えていくという筆者の姿勢が、彼の文学者としての美学の根底にあるように思う。

本書を読了して私が感じた疑問は、現代における、筆者の述べた自然の美や日本の伝統的な美の在り方である。例として「桜」を挙げると、桜は千年以上前から現代まで、依然として日本人にとって美しさの象徴であり、季節の移ろいによって生み出されるその儚さや刹那的な美は、古代から変わらぬ価値を持っている。しかし、現代において、桜の美しさを写真や動画で記録し、SNS に投稿したり、観光資源として利用されたりしている光景を見ると、筆者が主張した儚さや静寂といった美の感覚が、現代の生活の中で薄れつつあるようにも感じられる。しかし、これが必ずしも否定的な変化ではない。写真は忙しい人々にとっての心の安らぎや、他者と共有してコミュニケーションの媒介としての役割も果たしている。つまり、桜の無常観が希薄になりつつある一方で、現代の桜はその美に新たな価値が付加されていると考えられる。

筆者が昭和四十四年に「海外諸国との文化交流はいよいよ繁くなるなかで、自分の国の文化を立ててゆかなければならない」と説いた時代から、五十年余りが経過した。インターネットの普及やグローバル化が進んだ現代において、日本文化が他国の文化と混ざり合い、希薄になるという側面は確かにある。しかし、それと同時に日本文化が世界に広く知られる機会も増えている。現代での「文化を立てる」とは、単に文化の独自性を守ることにとどまらず、世界とのつながりの中で新たな価値を創造させていくことを意味しているのではないだろうか。

現代における自然の美には、確かに筆者が強調した「無常」や「静寂」は薄れつつあるかもしれない。しかし、情報にあふれる現代社会だからこそ、彼が求めた繊細で儚い美の感覚を感じ取ることが、現代人にとって心の安らぎや自己を見つめ直すための大切な時間になるのではないだろうか。喧噪の中で見失われがちな美を再び意識的に感じることで、川端康成が描いた日本の美の本質を再認識させる機会になるだろう。

優秀賞

52 ヘルツの声を聞かせて

『52 ヘルツのクジラたち』 町田 そのこ 著 中央公論新社

情報工学科 3 年 藤井 凜

希望の光を求め、ページを捲り続けた。常に鬱々とした空気が張り詰めている。貴瑚の過去は、想像を絶する凄惨さであった。毎晩、誰にも届かない悲鳴を上げ続ける。ただ、母に愛されたい、それはどれ程孤独だっただろう。

52 ヘルツのクジラとは、クジラ同士でも聞こえない声を奏でる世界で一頭しかいないクジラのことだ。誰にも届かない声、その孤独は果てしない。だが、主人公の貴瑚には心の声に耳を澄ませ、寄り添いたいとそばにいてくれる人がいた。親友の美晴と、彼女の同僚のアンさんだった。貴瑚を救うため、最後まで向き合った 2 人の強さや覚悟は、私にないものだった。

私がこの小説で最も身近に感じたのは貴瑚の小学校 4 年生の頃の女性教諭だった。彼女は貴瑚のシャツがアイロンがけされていないことを三者面談で母に指摘した。そのことに腹を立てた母は、冬休みの間来客用のトイレに貴瑚を閉じ込め、碌に食事を与えなかった。冬休みが明けると、綺麗なシャツを着て登校する貴瑚に良かったね、と声をかけ、貴瑚がずいぶん痩せたことに気付かない彼女。安易な善意は、更に貴瑚を苦しめることとなったのだ。貴瑚に必要なのは綺麗なシャツではなく寄り添う気持ちではなかったか。私も安易な目に見える物にだけとらわれて、誰かを傷つけているのではないだろうか。振り返ると安っぽい正義感で自己満足に浸っていた過去の自分に行き当たり、嫌悪感を覚える。人の善意とはなんだろうか、想像より難しいことなのだと、人との関わりが怖くなる自分もいる。

また私は、虐待や LGBTQ+ など、社会問題に直面したことがない。だが、孤独に対して、この本において深く共感した。私の家庭は母子家庭で、母は看護師をしている。小学生の時、母が夜勤で帰ってこない夜には泣きじゃくり、枕を濡らす日々を過ごした。また、愛犬が亡くなった際も心の穴が埋まらず、未だに二度と味わえない温もりを求めてしまう。孤独というものは果てしない不安と恐怖を与える。そしてそれを乗り越えたと思っても、ふとした瞬間再び襲ってくる。人の孤独や傷は、一生癒えることはない。本当に恐ろしい。だが、この本ではその孤独の辛さが分かる人達が支え合い、再生していく姿が描かれていた。52 を救うために己の過去と向き合い葛藤する貴瑚はとても勇敢だった。一度はコミュニティを捨て大分に移り住んだ貴瑚だったが、一人の少年の為に奮闘すること、その過程で更に傷ついてしまうこと、全てを覚悟して 52 に向き合う強さを持っていた。何故、愛情を受けて育っていない貴瑚は、人に優しくできるのだろうか。貴瑚は過去の経験故か、非常に共感性が高く、自身と似た境遇の人々に対し特に優しい態度を取っていると感じた。過去の傷を、他者を助ける原動力としていたのだ。物語の終盤には貴瑚は自分自身を受け入れ、過去を乗り越えることが出来た。52 と共に未来に希望を見出す。この過程すべてが私を深い感動へと導いた。

私たちは、それぞれにしかわからない痛みを抱えた孤独な人間だ。だが、一人では生きられず、言葉で、表情で、態度で自分を理解して欲しいと、寄り添って欲しいと叫びながら懸命に生きている。また、同じくらい強く誰かを理解したい、支えたいと欲している。分かり合えたようでいてすれ違い、それでも支えたいと助けたいと懸命にもがいている。滑稽だけど、それが生きていくということなのだろう。人の気持ちを想像する、言葉をかける、的外れかもしれない、偽善的だと自分を嫌悪する。だがそれでも、やっぱり支えたいと、諦めずに寄り添い続ける。きっとその過程が、傷ついた自分をも癒してくれるのではないだろうか。

傷ついた心が完全に癒えることはない。だが、人との絆が痛みを和らげ、心を温かくしてくれる。傷ついた心と生きていくことは可能なのだ。

これから私の生きる道にも困難は必ずあるだろう。そこに、共に歩いていける仲間を、少しでも増やし光ある道程にしていきたい。そして私も、誰かに温かい光をもたらせるような、そんな存在になれるよう、聞こえない声に耳を澄ませるようなそんな人になりたいと思う。

佳作

届かない苦しみを聴くために

『52 ヘルツのクジラたち』 町田 そのこ 著 中央公論新社
電子機械工学科 2 年 村本 知樹

声の届かない痛み。この本では虐待、ヤングケアラー、トランスジェンダーなどの、昨今問題として挙がっている事の当事者の痛み、気持ちの変化などを細かく書かれています。

僕はこの話を読み進めていく中で登場人物の色々な変化に、重点を置いて読みました。この本を読み特に印象に残った変化は三つありました。

一つ目は登場人物達の関係の変化です。最初の貴瑚と村中は村中の失礼な発言などで信頼は無く関係は最悪でした。しかし、村中が積極的に貴瑚を誘うことによって貴瑚の信頼を徐々に勝ち取りました。最後にも 52 に「大丈夫。このひとは、怖くないよ」と言っており、村中の優しさや行動で関係が修復されたと感じました。一方で貴瑚とアンさんの関係は、最初にアンさんが貴瑚を家から救い出したことによって「男女を超えた関係」であり、貴瑚がアンさんを信頼していることが分かります。しかし、アンさんは貴瑚に好意を寄せており、受け身すぎるため気づかれていませんでした。これは、積極的に貴瑚のために動いて信頼を勝ち取った村中と、受け身になり貴瑚に告白されることを待ち続けたアンさんが正反対であり、その人の行動によって関係性に変化が生じることが分かりました。しかし、正反対な村中とアンさんだが、アンさんが貴瑚の彼氏をストーキングしたことも貴瑚に幸せになってもらいたいというアンさんなりの優しさから来るものであるため、二人は正反対だが行動する理由は同じだと感じました。

二つ目は呼び名の変化です。僕は呼び名がその人に対してどのように思っているかが分かると思います。52 が虐待を受けている時は「ムシ」と呼ばれていたり、貴瑚が両親から虐待を受けている時も「あんた」と呼ばれたり、愛情があるような呼び方ではないなと感じました。貴瑚は名前が分からない少年を最初は「あんた」と呼んでいましたが、52 に変えたのは愛情が湧いてきたからだと思いました。そして 52 という呼び名には、貴瑚の誰にも聞こえない声を聞いてあげるといふ特別な気持ちがあったため、本名が分かっても 52 と呼び続けたと思いました。しかし、最後には本名の愛に呼び名が変わっており、これは、言葉を発することができ、声を聞いてあげることができたから 52 でなくなっただけだと思いました。また愛の祖父である品城に対する呼び方も「お義父さん」となっており、愛を育てるといふ貴瑚の気持ちの表れだと感じました。

三つ目の変化は人生の変化です。「第一の人生を終えた」これは父の介護に追われていた貴瑚をアンさんが助けた時に言った言葉です。貴瑚はこれまでの人生を終え、新しい人生が始まるというこの言葉を初めて見た際に、僕は一生一度きりという言葉があるけれど、一度きりの中でも何度も終わりも、始まりも迎えることができるということに気付くことなどができました。貴瑚の人生はアンさんに助けてもらって以後は、以前と比べ物にならないほど良くなっているため、人生は他の人にも変えてもらうことが分かりました。人生が変わった貴瑚は 52 と出会い、今度は貴瑚が 52 の第一の人生を終わらせ、第二の人生へと変えました。これは、アンさんが貴瑚の人生を変えなかったら変わることはなかったと思いました。なので人生の変化は変えてもらった人が、今度は変える側へと変化していき、つながっていくと思いました。

この三つの変化を引き起こした要因は、助けてあげたいという気持ちだと感じ、助けてあげたいなどの気持ちを行動に移し、相手がその気持ちを汲み取ることで変化できると思いました。

僕は声の届かない苦しみを和らげる方法は、声を耳で聞くのではなく心で聴き、寄り添ってあげることが必要だと思いました。アンさんが貴瑚のために改善策を探したようにすることが大事で、「わたしを見つけてくれてありがとう、愛」とあるように声が出せなくても行動だけで声の届かない痛みを見つけて出し、行動で苦しみを和らげることができました。声の届かない痛みは、どんな障害を持っていたとしても受けとめることのでき、声を聴いてあげられるものだと分かりました。

佳作 変化

『生成 AI で世界はこう変わる』 今井 翔太 著 SB クリエイティブ
電子機械工学科 2 年 岡田 紘

「なんでもかんでも AI をつけとけば良い訳ないでしょ？」
ニュースや話題を見て思っていた。感想文の本の中に AI に関する本を見つけた。AI を考えなしに称える本だったら文句でも書こうと考えつつ開いてみると思っているよりも、前向きで未知な AI のすがたがあった。

当たり前を送っている生活の中に AI がいない日はない。「AI は便利だ。」それでもやっぱり SNS で AI 生成のイラストを見かけると絶妙な嫌悪感を感じるのは何故だろう。AI で犯罪まがいな事も起こっているのに留まることを知らず成長し続けるのは何故だろう。そう考えながらこの本を手にとった。

本書は AI を研究している筆者が AI の誕生から現在、そして今後についてを簡単な技術解説を用い説明している。

この本の 3 章では「AI によって消える仕事、残る仕事」と題し、AI 登場後の仕事の形が書かれていた。現在の AI の前身であるディープラーニングが登場した 2013 年頃に発表された論文と 2023 年に発表された論文では影響を受けやすいとされた職業が大きく異なった。

3 章を読み中学校のサッカー部を思い出した。2 年生で新チームになり試合に出るようになった。その頃は MF でプレーをしていた。チームメイトや監督からも信頼されていたが、2 年生の終わりに調子が落ち、思うようにプレーできなかった。元々守備的なプレーをしていたこともあり監督が DF をやってみないかと誘ってくれた。あまり乗る気ではなかったが、試合に出られないよりマシだと考え SB をやってみた。かなり上手いき DF にコンバートをした。しかしもう一度 MF でプレーしたかった。大切な試合で相手のキープレイヤーとマッチアップすることになった。キャプテンも監督も、お前にしか守備できないと信頼してくれた。その想いに応えたくて無我夢中でプレーした。相手を完封した。初めて DF が楽しいと感じた。その後何度か MF もしたが DFの方が楽しかった。

ポジションをコンバートしチームの役に立つ、DF が楽しいと気がつく、どちらも環境が変わりそれを受け入れなければできなかったことだ。たとえ AI が仕事の形を変えようが、難しいと思われてきた仕事が簡単になろうが、変化を受け入れ自分自身が変わっていくことが大切であるのは同じだと考えた。

4 章では、「創作の価値」として生成 AI による芸術について書かれていた。筆者の実験によると、SNS に投稿された AI イラストの多くは他の AI イラストと共にもれている。しかし AI イラストであっても元々手描きのイラストレーターが加筆したものは多くの評価を受けている。それは AI を活用し効率よくクオリティの高いものをつくり出していたからだった。AI は創作ツールとして画期性があった。さらに「人間が描いている」という部分が重要なようだ。実験でも全て AI が生成しているが「AI が生成した。」といわれて見たものと「人間が描いた。」といわれて見たものでは評価に違いが出ていた。

自分も小さい頃から絵を描くことが好きで、今でもたまに描いている。序盤で書いたように AI を使えば素人でも簡単にイラストが生成できることに嫌悪感を抱いている。勝手に学習し、人のアイデンティティを奪うように感じる。本書でも触れられていたが、法的にすべてを取りしめるのは難しいようだ。「AI は新しいが技術が無いために形にできなかったアイデアを形にできる。」聞こえは良い。自分はそのアイデアを形にするために人は技術や考えを学んできたのではないのか、簡単に AI に明け渡してしまうのはどうなのかと疑問に思う。ヘタをすればアイデアを出すことも AI がしてしまうかもしれない。AI はすでに革新的な変化をもたらしている。だが変化は良いも悪いもある。前述では「変化を受け入れる」と考えたものの先が見えないほどの大きな変化は恐ろし過ぎる。「分からない」は計り知れない恐怖だ。人も時間も進むことと、振り返ることはできても立ち止まることと、戻ることとはできない。そう割り切るしかないと思う。変化が止まらない世の中で、この心意気は変化させずに生きたい。

佳作 声

『52 ヘルツのクジラたち』 町田 そのこ 著 中央公論新社
情報工学科 2 年 宮崎 蘭

「52 ヘルツのクジラたち」は、町田そのこさんによる感動的な物語です。この本は、他者と心を通わせることができない孤独や、過去のトラウマに悩まされながらも、再び自分を取り戻していく主人公たちの姿を描いています。特に、誰にも届かない声を持つ「52 ヘルツのクジラ」という存在が、物語の象徴として強く印象に残ります。読んだ後、自分自身の孤独や他者とのつながりについて深く考えさせられました。

物語の中心にいるのは、過去に深い傷を負い、他者との関わりを絶って暮らしている主人公、貴瑚（きこ）です。彼女は、亡き母親やかつての家族との関係から逃げるようにして、都会を離れ、静かな海辺の町で一人暮らしを始めます。貴瑚の心には、誰にも理解されない孤独と絶望が渦巻いています。このような状況の中で、彼女は偶然、隣人の愛（いとし）という少年に出会います。愛もまた家庭内での虐待やいじめなど、過酷な現実で苦しんでおり、心を閉ざしていました。愛との出会いによって、貴瑚は少しずつ心を開いていきます。最初は、互いに傷つき、孤独を抱えたままの関係でしたが、次第に二人は支え合い、共に立ち直ろうとします。貴瑚が愛に対して母親のような存在になることで、自分自身の過去とも向き合い、再生の道を歩み始めるのです。ここで重要なのは、二人の関係が、単に「助ける者と助けられる者」という一方的なものではなく、互いに依存し、助け合うことで成り立っていることです。この点が、他の小説とは異なる魅力だと感じました。タイトルにある「52 ヘルツのクジラ」とは、実際に存在するクジラの種類で、通常のクジラが出す音よりも高い周波数の鳴き声を持つと言われています。そのため、他のクジラたちに声が届かず、孤独な存在として知られています。この「52 ヘルツのクジラ」は、物語の象徴として、主人公たちの孤独や、他者とのつながりを切望する気持ちを表しています。貴瑚や愛が抱える孤独は、まさにこのクジラのように誰にも届かない苦しみを象徴しているように感じました。しかし、このクジラが象徴するものは、ただの孤独ではなく、誰かに届くことを強く望んでいる存在であるという点が、物語全体のメッセージを深くしています。

物語の中で印象的だったのは、貴瑚が愛を救おうとする場面です。彼女は、自分自身がかつて経験した痛みや苦しみを愛に重ね合わせ、その痛みから救い出そうとします。しかし、それは同時に、貴瑚自身が自分の過去と向き合い、乗り越えるための行動でもあります。この部分は、誰かを助けることで自分も救われるというテーマを強く感じさせ、読んでいて心に響きました。また、愛も貴瑚との関わりを通じて、自分の心を少しずつ解放していく姿が描かれており、希望と再生の物語として深い感動を与えます。本作を読んで感じたのは、私たちが日常の中で感じる孤独や、人間関係の難しさです。誰もが心の中に、他の人に理解されない思いや孤独を抱えて生きていると思います。しかし、それを抱えたままでは私たちは本当の意味で幸福になることができないのではないのでしょうか。誰かに心を開き、他者とつながることで、初めて孤独から開放され、心が安らぐのだと思います。物語の中の貴瑚と愛がお互いに心を開き、共に歩むことで再生を果たす姿は、私たちにその重要性を教えてくださいました。また、物語を通じて周囲の人々とのつながりの大切さを改めて考えさせられました。現代社会では SNS やインターネットを通じて簡単にコミュニケーションが取れる一方、実際には誰かと深くつながることが難しいと感じる人が多いのではないのでしょうか。物語の中で描かれる貴瑚や愛のように、表面的には誰かと関わっていても、心の中では孤独を抱えている人々がたくさんいると思います。この作品はそんな現代の私たちに対して、本当の意味での人とのつながりがどれほど大切かを問いかけているように私は感じました。

「52 ヘルツのクジラたち」は、読む人に大きな感動を与えるだけでなく、自分自身や他者との関係について考え直すきっかけを与えてくれる作品です。孤独や苦しみを抱えたまま生きることは誰にとっても辛いことですが、それでも誰かとつながり、助け合うことで私たちは前に進むことができるのだというメッセージが強く心に残りました。今回、この本を読んで私も自分の周囲にいる人たちとのつながりを大切に、孤独を感じている人に対して手をかけるような人になりたいと思いました。誰かにとっての「52 ヘルツのクジラ」にならないように、自分の声も大切にしつつ、他者の声にも耳を傾けることが大切なのだと感じました。

佳作

諦めない心

『ファーストペンギン シングルマザーと
漁師たちが挑んだ船団丸の奇跡』 坪内 知佳 著 講談社
商船学科 1 年 藤本 大雅

表紙に船と漁師の姿があったので、興味があり、手に取った。読み進めていくうちに本に書かれている出来事が、自分の頭の中で次々と実際に見ているかのように想像することができた。その理由は、自分の祖父が漁師であり、本で書かれている様子が日頃から聞かされていた色々な話ととても似ていたからだ。祖父も自分も今住んでいる周防大島出身ではなく、もともと県外からやってきて祖父は漁師になった。船を置くのも、漁業組合の許可がいる。漁師になるのも簡単ではなく、準漁師と本漁師、正式には準組合員、正組合員と言うのかもしれないが、昔からの目に見えない暗黙のルールがそこには存在し、本に書かれているような様々な嫌がらせなどもされている。いつまで経ってもよそ者というレッテルがついて回る。正組合員より魚を獲れば当然、周りは妬み、どんどんマイナスなことが祖父に起こっていると聞いた。もうそこは、新参者が何を言っても受け付けない体制が出来上がっていて、何か新しい案を出したり、行動してもすぐに潰されてしまうのが現状だ。祖父も、正組合員の中に共感してくれる人や今の組織体制に疑問を持ってくれる人がいれば何か変化があっただろう。

この本の主人公は、漁業改革をするため、新しいことに諦めずに挑戦しており、その姿がとても印象に残ったし、すごいことだと感じた。市場に出せない魚を消費者のニーズに合わせて加工し、新鮮な状態で届ける。その全てを組合を頼ることなく、自分たちでやらなければならないことがどんなに大変なことかがわかる。釣り好きな自分がもし同じことをしろと言われたら、とても体力が持たないと思う。それは、朝早く漁に出て魚を獲って、体力が消耗している状態で、やったこともない作業を時間との戦いの中でやるというのはとても困難なことだからである。それを何年もかけ軌道に乗せ、漁業の発展、そして自分たちの生活のために貫き通した萩大島船団丸の人たち、主人公に対しては尊敬しかない。

漁業と言うのは、元々自然を相手にすることなので、魚が獲れなければ成り立たない。安定的に魚を獲り、それを確実に消費者に届けている取り組みは、魚離れがある近年、とても良いことだと感じた。新鮮な魚を食べれば、改めて魚のおいしさに気づき、魚の需要が増加する。重要なことは、需要と供給のバランスが取れて初めて成立する。

この本では漁業についての取り組みだったが、漁業に限らず、前例のないことをするときには、必ず何をするにも周りは批判的である。前例がないからといって、最初から上手くいかない決めてしまうのが現実だ。上手くいくかもしれないし、いかないかもしれない、一人では何をするにも大変である。必ず周りの協力が必要だ。周りが動けば動くほど物事が少しずつ進む。自分に置き換えかえて考えると、何か新しい物事を始めるときに周りから反対されたらきっとすぐに諦めて、行動に移すのをやめると思う。本の主人公のように、上手くいかないなら、それをどのようにしたらいいのかと考えることをせずにはただ、無理だと思えると思う。何かきっかけがないと中々新しいことを周りの人に受け入れてもらうことはとても難しい。それでも行動をしなければ何も始まらない。自分に賛同してくれる人が、一人また一人と増えていくことによってでしか状況を好転することはできない。

また近年、地球温暖化により、海水の温度が上昇しており、魚にとって悪影響な環境に変化してきている。そのため、段々と漁獲量が減ってきているので、魚を獲るということだけに目を向けるのではなく、どうしたら魚が海に戻ってくるかを考えないといけない。人間が暮らしていく中で、家庭からの排水を気をつけたり、小さくてもできることを徐々に増やしていくことが大切である。

この本を読んで、新しく物事を始めるときには、かなりの強い意志が必要であり、周りの人たちの協力が不可欠であるということを学んだ。特に、高齢者といわれている世代の人たちは、今までやってきたことへの自負があり、今までやってこれたというプライドがある。今まで自分たちのやってきたやり方が全て正しく、それ以外の新しいやり方は受け付けないという人が多い。そのため、その考え方を覆すだけの根拠と実績が、漁業に限らず、全てのことに必要だと感じた。

今からの時代は、今まで当たり前だったことが当たり前ではなく、新しい考え方をしなくてはならなくなっている。良いところは残しつつ、時代に合わせて変化し、進化し続けなければならない。私もこの本の主人公のように、自分でやると決めたことはたとえつまずいたとしても、くじけず、様々な方法を模索し、やり遂げることで強い人になりたいと思う。

第 4 回読書ラリー優秀者発表

良書に親しみ教養を高めることや図書館利用を促進することを目的として、第 4 回読書ラリーを令和 6 年 12 月 2 日（月）～令和 7 年 1 月 10 日（金）の期間で開催しました。今回は、実施期間中に借りた図書の感想・推薦文を所定のシートに記入し、記入した図書数の上位者を表彰する形で実施しました。

昨年度より参加者は減りましたが、提出された感想・推薦文はどれも良書に親しんだことがうかがえるものでした。令和 7 年 2 月 5 日（水）に最優秀賞 3 名、優秀者 3 名を表彰しました。

最優秀賞

商船学科 2 年

佐上 茉香太

情報工学科 2 年

樋口 聖人

情報工学科 3 年

村塚 永琉

優秀賞

情報工学科 2 年

村川 諒太

情報工学科 2 年

杉谷 篤人

情報工学科 2 年

岩政 佑樹



読書ラリーの表彰

教員推薦図書

新版 動的平衡 生命はなぜそこに宿るのか

福岡 伸一 著

小学館新書

電子機械工学科 岡野内 悟

世の中のものは移り変わっています。人は昔からの自然の循環システムの中で暮らしてきました。現在は技術力、産業力、経済的な価値観を優先し、持続可能な循環型社会を掲げる一方で、環境破壊、戦争、地球温暖化による気候変動の影響と思われる自然災害に遭遇しています。この本は、生命とは何かを元素、分子、アミノ酸、タンパク質、DNA などの物質的な観点で進められてきた生命科学の研究の流れの中で、生物が形を留める仕組みを提示しています。

私たちの身の回りにある“もの”は木材、金属、プラスチックなどの材料でできていて壊さない限りその形を保ち、長く使えるように思っています。一方、生き物は食べ物を食べて消化し、取り込んだものが体全体に拡がって置き換わることで形を維持しています。よく考えてみると、“形あるものは必ず崩れる”という言葉があるように工業製品も、建築物もいつかは壊れ、使えなくなります。伝統的なものが今日あるのは、大切に使われ、修理や保守、伝承を続けてきた結果といえます。また、人が使えなくなったものをどうするか、後回しにされている大きな社会課題です。

もう一つ大切なことは、同じ形をそのまま残すかどうかです。歴史の保存などは忠実に残すことが求められますが、実用的には今の使い方にあった機能やデザインにするなど、変化させることも大切です。このように、壊す、置き換えることを繰り返しながら、“もの”も生物も存在していると考えられます。著者の概念とは少し違うかもしれませんが、壊したり作ったりを繰り返しながら形を保つ「動的平衡」という概念は、奥が深いと感じています。

なお、先端的な生命科学分野の研究者の取り組み方を知ることができて、私自身、勉強になりました。

教員推薦図書

人工知能プログラミングのための数学がわかる本

石川 聡彦 著

KADOKAWA

情報工学科 中村 桃太郎

近年、ChatGPT などの生成 AI をはじめ、人工知能（AI）は私たちの生活に深く関わる技術となりつつあります。しかし、AI を活用したプログラムを理解し、実際に作成するためには、数学の知識が欠かせません。今回お勧めする『人工知能プログラミングのための数学がわかる本』（石川聡彦 著）は、AI の基礎となる数学を分かりやすく解説した一冊です。

本書では、線形代数や確率統計、微分積分など、AI のアルゴリズムを理解する上で重要な数学の知識を、具体的なプログラムとともに学ぶことができます。特に、Python を用いた実践的なコードまで公開しているリンクも掲載されており、Python が使える環境なら自分のパソコンでも実際に手を動かして試しながら、プログラミングのための数学の理解を深めることができます。これにより、数学が苦手な人でも、AI に必要な計算の意味を直感的に捉えることができるようになると思います。

本書は、AI に興味があるが数学に苦手意識がある方、あるいはプログラミングを通じて数学を学び直したいと考えている方におすすめです。AI プログラミングの世界へ踏み出す第一歩として、ぜひ手に取ってみてください。



ブックハンティングに参加して

広島でのブックハンティングは、とても楽しい経験でした。自分が行ったことのある本屋よりも大きな本屋で、約一万円分の本を選ぶのはワクワクする時間でした。自分の知らないジャンルの本や、普段読んだり手に取らなかったりするような本を見つけるのが特に楽しかったです。図書委員で偶然会った知り合いの先輩と一緒に、意見を交換しながら本を選ぶことで、新しい発見がたくさんありました。次回もまた行きたいと思います。

商船学科1年 大宅 巧真

まず、7階だけでなく8階にも本があることに驚きました。今回、私は7階のみを見て回ったのですが、そこだけで、本がとても多かったです。書店には、文庫本だけでなく参考本や文学など幅広いジャンルの本がありました。実際に、前日にピックアップしておいた本が3冊ほどあったのですが、すべてそろっていました。これほど広い書店は初めてだったので、とても楽しかったです。

情報工学科1年 寶井 萌々子

中学校までの委員会では、委員会活動で学校外に行くことなどなかったため新鮮でかなり面白かった。また、僕は本がかなり好きなため、自分で図書館に入れる本を選ぶ作業がとても楽しく、また参加してみたいと思った。本の値段は1万円を少し超えてしまったため、もし来年も参加できるなら、今度は1万円ピッタリを目指して本を選びたい。そして自分が読みたい本をかなり選んだため、自分がおすすめる本を選びたい。

電子機械工学科2年 深内 竜介

僕は今回、図書委員として、ブックハンティングに参加して、とても良い経験をする事ができました。このブックハンティングに参加して、今まであまり話す機会のなかった他の学科の学生と仲良くなることができました。反省点は、同じ学科の先輩方との会話がほとんどなかったのも、もっと先輩方とコミュニケーションをとろうと思いました。また参加できる機会があれば、このことをしてみたいと思いました。

電子機械工学科1年 居藤 彰汰

私は本が好きでよく図書館を利用しており、これまで、たくさんの良い本と出会ってきました。

しかし、私は、どのような経緯で本が入ってきているか知りませんでした。

今回、実際に行って自分で本を選んでみて、学生たち、自らが選んでいるということをじっくり感じる事ができました。

とても楽しかったです。

商船学科2年 白石 瑞稀

私はブックハンティングに参加してよかったと思う。行く前から選ぶ本は決めていたが、実際に行くと誰かに購入されており、買うことができなかった。そのために別の本を探す必要ができた。そこで本を見てみると、新しい沢山の本があった。その中で、先輩が勧めてくれた本を選んだ。普段は選ばないジャンルだが、先輩の紹介で興味がわいた。先輩などから、普段自分の読む本とは別のジャンルの本と出会う機会にもなった。

情報工学科2年 中村 栄斗

前年は少しコロナウィルスが終わりかけていっても、感染の危険があった時期だったので、参加した学生はみんなマスクを着用し、お互いに距離を取っていましたが、今年度はマスクを着用している人は殆どおらず、和気藹々とした雰囲気を楽しめていたと思います。今回のブックハンティングで図書館に並べられる新しい書籍を、本校の学生が一人でも多く手に取っていただけたらと思います。

商船学科3年 中本 滉太

自分が本を読むときは図書館で借りるか、電子書籍で読む場合がほとんどなので、実際に紙の書籍を手にとって購入するという体験がとても新鮮に感じられました。また、普段関わりのない他学年の方と話しながら本を選ぶ事ができ、良い交流の場になったと思います。

西広島には行ったことが無かったので移動に大きな不安を抱えていましたが、ブックハンティング経験者の上級生の方に道中教えてもらいながら辿り着く事が出来ました。

情報工学科3年 倉増 風紗

普段はあまり学校外での活動が少ないため、このような経験はとても新鮮でした。まず、本屋さんに入った瞬間に感じたのは、あふれるほどの本の量に圧倒される感覚です。普段から読書が好きな私にとって、本が整然と並んだ本棚を見るだけでワクワクしました。本を選ぶ際には、どの本が学校の図書館にふさわしいかを考えるのが少し難しかったです。自分で本を選ぶのは楽しかったので、また参加したいです。

情報工学科4年 岩政 奏翔

僕は中学校から本を全く読まなかった人間でした。しかし高専に入り図書館を利用する回数が増え、本に対しての興味が湧き今回ブックハンティングに参加することを決めました。当日は店内を歩き回り、様々なジャンルの本に触れることで、自分に合った一冊を見つける楽しさを知りました。本を読む習慣がない人でも、実際に本に触れてみると、新しい世界が広がる可能性を感じました。これからはもっと積極的に本を読んでみようと思います。

電子機械工学科3年 上村 輝

いつもは読むことのないような本にもたくさんふれ合うことができて、とても良い経験になったなと思いました。

私は、本を読むことが苦手なので、字が少ない本を多く選びました。私のように読書が苦手な人でも手に取りやすい本があると思うので、ぜひ読んでみてください。

商船学科4年 大田 美咲

普段あまり本を読まない自分にとってブックハンティングは新鮮な体験になりました。無理に読もうとするのではなく、直感で本を選んだ結果、思いがけない発見がありました。自分に合う本が見つかる、読書のハードルが少し下がり、楽しさが感じられるようになりました。これを機に、少しずつ自分の読書の世界を広げていけたらいいと思います。

商船学科5年 小田 達也



ブックハンティングの様子

ブックハンティングは今回で3回目の参加でした。初めて参加する下級生にアドバイスをし、自分自身も前から読んでみたいと思っていたものを選ぶことができました。

実際の書店で選ぶことのできるブックハンティングは貴重な機会ですが、ブックハンティングに限らずとも、図書館にはリクエストという仕組みがあります。小説でも研究資料でも、入れてほしい本があるという人は、気軽に相談してみてもいいのではないでしょうか。

電子機械工学科5年 山崎 樟太

去年に引き続き、今年もブックハンティングに参加しました。かれこれ、ブックハンティングに参加するのは4回目で、本を選んでいく作業自体はもう慣れたものですが、それでも本屋に足を運ぶたびに、毎回新しい出会いがあってワクワクします。今年も、ほしかった本だけでなく、その場で気になった本を買うことができました。私は5年生なので、今回は最後のブックハンティングとなりますが、図書委員になり、このような貴重な経験ができて、本当に良かったと思っています。

情報工学科5年 吉野 桜花



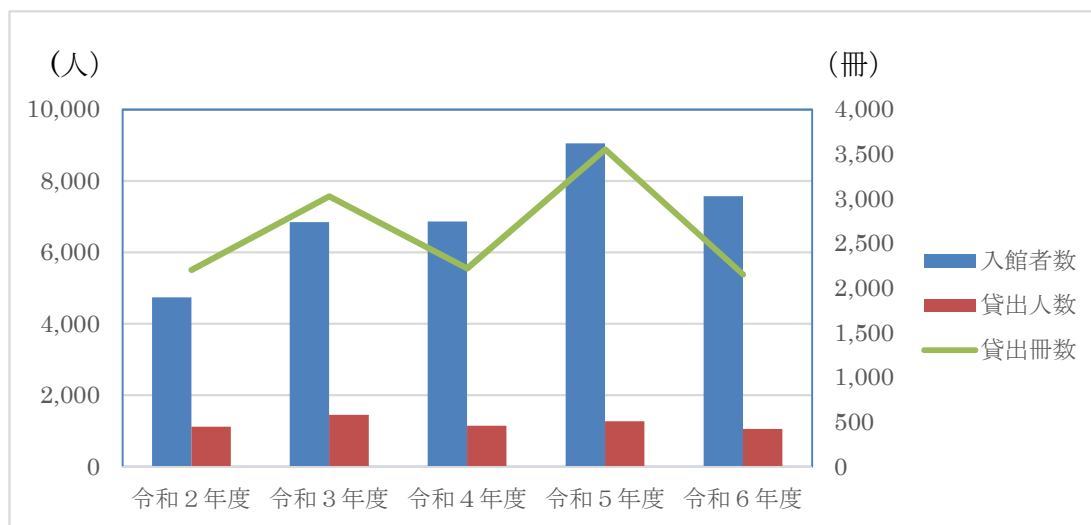
ブックハンティング参加者



図書館利用状況

令和7年1月31日現在

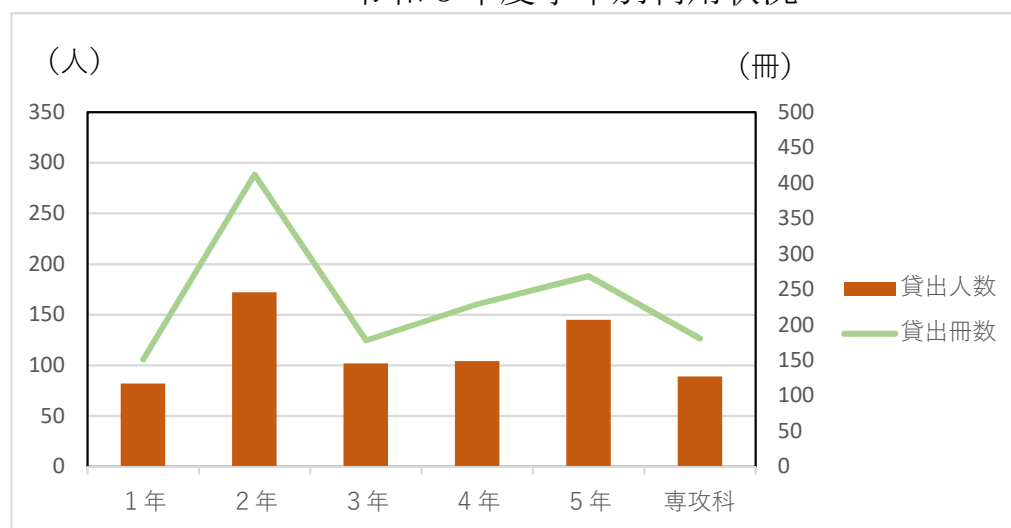
年度別入館者数・貸出人数・貸出冊数



	令和2年度	令和3年度	令和4年度	令和5年度	令和6年度
入館者数	4,740	6,847	6,864	9,045	7,570
貸出人数	1,115	1,443	1,140	1,272	1,051
貸出冊数	2,202	3,028	2,221	3,552	2,153

令和2年度は新型コロナウイルス感染対策のため閉寮・時間外閉館のため入館者・貸出実績ともに減少

令和6年度学年別利用状況



	1年	2年	3年	4年	5年	専攻科
貸出人数	82	172	102	104	145	89
貸出冊数	151	412	178	229	269	181



大島商船高等専門学校図書館だより 第33号

2025年（令和7年）3月18日発行

編集者：大島商船高等専門学校図書館運営委員会

発行者：独立行政法人国立高等専門学校機構

大島商船高等専門学校

〒742-2193 山口県大島郡周防大島町大字小松 1091 番地 1

電話（0820）74-5454（図書係）

<https://www.oshima-k.ac.jp/campus/facility/library/>